

2024年5月29日開催国際交流講演会報告書

講演者の川崎剛教授は、日本で大学卒業後アメリカに渡り、政治学の Ph.D. を取得後、カナダのバンクーバーで長年教鞭を執っている。日本国籍（カナダ永住権）ゆえ、日本にはよく来るが、東京にいることはあまりないので、今回国会図書館での調査の間を縫って、この講演会を開催した。

戦争はない方が良いに決まっているが、日本は中国や韓国といった隣国との関係ですら微妙だ。いや、隣国だからこそ複雑な関係が見られるとも言える。韓国は誰が大統領になるかによって対日関係が大きく変わる。中国は「海洋強国」のスローガンに見られるように、東シナ海・南シナ海で自国の「管轄権」を拡大しようとしている。「みんな仲良く」とは行かないのだ。

そこで安全保障を供与するのが、同盟国アメリカである。しかし、アメリカの外交にこそ、アメリカの国益がにじみ出ている、ウクライナやイスラエルを見るだけで、そこには矛盾が多く見受けられることが分かる。

そこで、アメリカの隣国カナダが、第三者として日米関係をどう見ているか、という視点について、川崎剛教授に話していただいた。論点は大きく三つである。第一に、どういう「国際秩序観」が展開されているかである。「アメリカによる平和」は、その恩恵を受ける国と、そうでない国との間で落差が大きく、カナダは前者であるが、その矛盾も数多く見てきた。第二に、第二次世界大戦後、長らくこの国際秩序を維持してきたのは「アングロサクソン」勢力であるが、今日の国際関係は新興国が台頭し、地球全体の一人当たり GDP が 1 万ドルを超えるに至ったこともあって、現行の秩序に不満を持つ国々も多くなった。これに対し、アングロサクソン側はカナダ、豪州、ニュージーランドと秘密情報共有の仕組みを作って対抗している。第三に、以上のような国際秩序観分裂の時代において、自国の安全と経済的繁栄のために「戦略」を構築していくことの重要性について強調した。カナダは HUAWEI 問題に見られるように米中対立の前哨戦に位置する。つまり、アメリカでも中国でもない第三国で、米中対立が起きることを意味し、日本もその例外ではないことを示唆した。

質疑応答は、この米中対立の狭間にあって、カナダが考えている自己防衛策や今後の方針について、また同じ問題を日本やオーストラリアに当てはめたらどうなるのかという点に集中した。最後の 10 分ほどは、活発な討論が行われた。

なお、講義自体は日本語を主に使っていただいて、国際関係学の専門用語については英語でも紹介をしてもらった。参加人数は 9 名（教員 2 名、外部の研究者 2 名、院生 1 名、学生 4 名）であった。



国際交流講演会
日本とアメリカ
— 第三者カナダの視点から —

講演概要
カナダなんて、安全保障政策変らないうえ、だって、隣国アメリカから、攻められることないから。それに対して日本は、中国、北朝鮮、ロシアを危ない国に置いている。先日、岸田首相訪米では「勇と勇を組んで」脅威に立ち向かうと声明を出した。勇と勇を組んで、戦勝国アメリカの優位性を維持して、これまでアメリカがどどんと進んできた。

この思想は、正しいのか。日本人だが、日米どちらにも居ない第三国カナダの研究家から、いざの日米関係を見てもらう。

2024年
5月29日(水)
11:00~12:30
明治大学駿河台キャンパス
リパティタワー11階 1114教室
使用言語: 日本語(ときどき英語)

講師
川崎 剛氏
所属/ワイモフレイザー大学教授

講師経歴
同志社大学を卒業後、米、フランス、ドイツで Ph.D. 取得後、カナダのワイモフレイザー大学で長年教鞭を執る。専門は北太平洋地域の国際関係、日本政治外交。主な著書に、『社会科学者のための「優秀論文」作成術』(国研書房、2010年)、『社会科学としての日本外交研究』(三輪ワカ書房、2015年)、『大戦略論』(国研書房、2019年)等多数。